

## 印度の宗教（上）：雑録

著者	巴城生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	41
ページ	25-33
発行年	1895-12-17
その他の言語のタイトル	印度の宗教（上）：雑録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4722">http://hdl.handle.net/2298/4722</a>

ども、名歌には必録句の多きものなり、盧延遜が苦吟の詩に、莫話詩中事、詩中難更無、吟安一個字、撚斷數莖鬚、險覓天應闕、狂搜海亦枯、不同文賦易、爲著者之乎、是ノ詩、々作の苦を説盡せり、歌に於ても乏かり、深更一辭を安じわづらひて、數莖の鬚を撚斷すること幾回ぞ、此の如く鍊磨工夫を積む、故に一篇の文をかくにも、筆とれば、やがてこの鍊磨工夫の一點に、老らずく精神は注ぐなり、精神をして茲に注がしむるは、詩歌の勢なり、文章の詩歌に資ること大なりといふは、この故なり、されども、その境に至りたる者ならでは、この味知れがたし、

## 印度の宗教 (上)

巴 城 生

歴史以前、中央亞細亞の裏海に瀕せる高原に一の人種あり。自ら呼んでアリヤン人種と稱す。高貴なる血族の義なり。是れ實に後世のアリヤン人種、及び印度歐羅巴人種(即ち希臘羅馬印度の人民)の祖先なりとす。何れも或は哲學により、或は儀禮によりて、眞理を求め、安心を得んとせり。

當時、猶太人は正に撒攪山より巨材を採伐して、以て彼の宏大なる殿堂を建設せんとせる時なりしが、アリヤン人種の文明も、之に比して大に劣る所あらざりき。政治整頓し、居住安全に、農業行はれ、水車織物器械陶器一として用られざるなく、金銀の貨幣流通し、銅製の武器備はれり。實に彼等は、紀元前千二百年に於て、既に叙事詩を吟詠したりき。亦以て文物彬々たるものありしを知るべし。

彼等が一神を禮拜せるハ、其最古の傳説に、  
彼の外に神あることなし、

と云へるを以て之を知るべし。然れどもこれも最初の信仰にて、後には偶像禮拜に傾き終れり。此時に當りて、驟然起て舊宗教の爲めに大氣焰を吐きしものこそあれ、即ち改革家アロアスターなりとす。

アロアスター起てより、舊宗教と偶像教との二大派生じ、その争端甚しきものありき。此争端に於てハ、後者は終にアロアスターの爲めに壓倒せられ、此教に属するものは、去てヒンドク्रीシユ山を横りインダス河を下り、西北より印度に入り、此に其居を定めたり。之を今日所謂婆羅門種族と稱する者の祖先となす。

彼等は印度に入りて、深山大森に棲息せる土人と戦争をなし、國土を押領せんとせり。土人は始めは頑然として之に抵抗せまが、終にこの優勢の下に服従せざる可らざるに至り、或ハ逃れて南方印度に隠れたり。是に於てか征服者は高等の階級を占め、土人は之に従属したりき。是れ後代三千年の久しき間繼續せる、鉄鎖制度とも稱すべき階級の起源なりとす。嗚呼、之によりて印度の勢力を壓抑拘制し、其命運の銷亡を速かならしめしこと幾許なや。

婆羅門種族ハ、征服の權利によりて、社會に於ける最高の位地を占め得たり。而して尙ほ進て宗教の制裁を以て、その位地を堅固にせんとせり。

梵天王ブラフマが人間を創造せし時、婆羅門種族ハその頭より生れ、士卒クシヤトリヤはその胸より、商人ヴァイシヤは其腰より、職工アイラハその足より、各々生れ來れり、

との寓言は、實に婆羅門種族の瞞着手段として構造せられたるものなり。彼等は之によりて通常人民と異なりたる神聖の高位を保つ權利を得、ブラマの名を襲ふて婆羅摩人と稱せり。即ち彼等は其他の

階級の人民を統御するものなり、印度宗教の僧侶として該種の儀式を司り、又獨り經書を闡讀する特權を有せり。誕生の卜筮も、婚禮の司會も、死者の引導も、秘密の祈禱も、彼等の専ら掌握せる義務なりき。

彼等は天地の仲保者たり。即ち彼等は神にして人、人にして神たりき。婆羅摩人を呪ふ者ハ責罰を蒙り、其影に蔽はるゝものは祝福を受くと稱せられ、其社會に於ける威光、赫として人目を眩するに足る。事情既に斯の如し、彼等がさも卓越せる人物なるが如く、容貌を修飾し、高慢にも地上に於ける神の代表者なりと自負せる、決して怪むに足らず。當時の人民も、亦之に黙從せざるべからざりしなり。摩訶の法典の一條に曰く、

高貴なる延生、優等なる起原の故を以て、又韋陀ヴェダを專有し、神聖の儀式を司る故を以て、婆羅門種族は諸階級人民の主たるべきものなり。

婆羅摩人は、假令ひ學あるも學なきも、權威ある神たり。猶ほ火が、神聖にせられたると否とに拘らず、權威ある神たるがごとし。

又印度叙事詩の絶美なるものと稱せらるゝマハブハタに、比武の狀況を記せる條あり。曰く、

音楽は洋々として起り、觀衆は狂するが如く叫び、歡呼の聲宛ら海浪の轟くが如き。折しも、看よ、婆羅摩人は雪の如き毛髪と、銀の如き鬚髯とを振り立て、頭にハ白色の花環を結び、身には白法衣を纏ひ、手には神前に供へたる鞭を携へ、徐ろに比武場の中央に進めり。げに青天に日輪の懸れるも斯くやあらん、と思はれぬ。

婆羅門種族は獨り高貴なり。印度に於て全社會の蝶番となれるは即ち此種族なり。之を例へていは

ば、此階級に屬するものは一大中心天體に去て、他の種族ハ之を過る衛星の如し。婆羅門種族にあらざれば、神位を享くる能はざるは更にもいはず、却て嚴酷なる羈絆の下に沈吟せざる可らず。假令三階級のもの、相結で婆羅門種族に反抗せんとするも、その空拳徒手たるを奈何せん。

此等の階級は數百年の歳月を経て、其根據牢として盤石の動らざるが如くなりぬ。此境界線を脱出除去せんとするが如きは、人々の夢想だもせざりし所、又この階級を脱去せば、永く其身に災害を蒙らざるべからずとまで信せられたり。

吾人試みに彼等印度人の狀況を想察するに、吾人は一點の希望をも彼等に置く能はざるなり。吾人をして斯の如き制度が國民の進歩に及ばず影響何如を想像せしめよ。國民の生活とハ、即ち下級の人民が高等に進まんとして、苦心經營、相競争することの別名なるを思へば、彼等印度人の境遇も、亦憐むべきにあらすや。

彼等は出身の策施すに由なく、永久隸屬の位地に立ちて、これに安させる可らず。されば、印度の多數人民ハ未だ曾て大望といふことを知らず、此精神全く其社會に死滅し終りぬ。勞働者の家に生れたる者は、生涯磨練の業務に服するや、或は其他の賤業者と伍を全ふせざる可らず。現にボンベイの水運び又は掃除の賤業を執る者は、即ち遠き昔の水運び又は掃除の賤業を執りし者の子孫たり。

抑も社會は一個の梯子なり。然れども印度にては、之を攀て高きに登るを許さず。嗚呼誰ら之を排除するものぞ。彼等婆羅門種族は到底此重任に當るべくもあらず、否却てこの障礙物こそ、彼等が據て以て其宗教の城砦となす所のものなれ。豈に憐むべきにあらすや。

印度の社會實に斯の如し、以て此社會に發生せる宗教の特性も亦知るべきのみ。一言以て之を蔽へば

印度の宗教——婆羅門教は階級の宗教なり、方便的宗教なり、社會的に又政治的に停滯を與ふる宗教なり、即ち貴族の高慢なる羣衆の結果なり。然れども其教義の中、亦た大に吾人の觀察を價し、注意を促すに足る所のもの少なからず。且つ東洋哲學に意を注ぐ者の先づ研究を急とすべきものなれば、之を攻究するは實に興味あることにして、且つ必要の事たり。

今其經書と教理と、及び其道徳上の結果とを考察して、此宗教の大意を窺はんと欲す。

印度教の經書を分ちて韋陀經ヴェーダ、婆羅摩那經ブラマナ及び優波尼沙土經ウベニシャツトの三とす。其外諸種の詩歌文章學て數ふ可らず。皆梵語を以て之を記述せり。

(一) 韋陀經 Veda は知識の義なり。拉典語の *Videa* と相類す。韋陀經は自立自存の存在者梵天ブラフマが、呼氣を發する如くして造りしものといへり。經を分ちて四とす、即ち次の如し。

(イ) 讚誦經 Rig は Rio より出で、讚美の義なり。千十七首の歌を收め、經書中最も古く、且つ最も重要なるものなり。何れも諸神を讚美せる歌にして、儀禮上の目的の爲めに造られたるものにあらず。

又中にはアリヤン人種の祖先が、猶ほ印度に移住せざりし時に、歌頌せるものを含めりといふ。

(ロ) 呪咀經 此經文は最も新しきものにして、且つ最も興味あり歌集なり。中に就て、讚誦經の歌

と全じき程のものあれば、亦大に趣を異にせるもの少なからず。之を要するに、惡魔の威力を妄想するの酷しき、遂に此經書の歌謠起りしなり。今日に至りても、尙呪咀に用ゆべき語なりと信せらるゝとす。

(ハ) 祭詞經 此經文も亦讚誦經に基せり。時移るに従ひ儀禮繁多になりしうば、供物等の事に關し

て其大要を記述せるものなり。又儀式に要する歌謠をも收む。

(一) 韋陀經 蘇摩といふは一種の植物にして、原語は悅意花の義なりとぞ。之を用ゆる儀式を蘇摩式といひ、懺悔の爲めに之を行ふ。此時に用ゆる歌謡を收む。

韋陀時代の詩人は何の神に讚美祈禱をなせしか、は大に注意すべき問題なり。之を要するに、彼等はアラヤン人種と同一自然力を畏敬し、一言以て彼等の宗教を括言すれば、其奉ずる所は自然崇拜教なりしなり。其兩人種の奉ずる所は、たゞ自然の影響の差違より、自ら其思想に差違を生ぜるあるのこと。韋陀經の詩句は皆な寧ろ宗教的ならず。「人々の皆嗜好」と題する詩の中には、次の如き意味の句あり。曰く、

人の嗜味と職業とは種々にして、從てその目的各々異なれり。鍛冶屋は鍛ひ、醫師は療し、僧侶は信徒を得て收得を計る。各種の職工は、皆製作に従ひて、富者の黄金を配たんとす。父は醫をなし、子は歌ひ、母ハ穀物を粉にせんとて勤勞す。方法はくさくさなれど、富を得んとて目的に向ひ馳するは、宛ら遠く迷へる牛を尋ねて走る人の如し。

以て韋陀經の宗教的ならざるを徴すべし。

(二) 婆羅摩那經 此經文は韋陀經の第二の部分にして、最高種族の主權に關係する所多く、重に教義の注釋及び儀式の記載を收む。此經文時代に至りて、犧牲に關する觀念、儀禮の改善甚だ見るに足るものあり。之を要するに、婆羅摩那經は婆羅門種族が宗教上の儀禮、殊に複雑なる犧牲式を行ふに當りて、參考すべき爲めに作られしものにして、若し韋陀時代の宗教を自然崇拜教の代表者といふを得ば、此時代の宗教を儀禮經の首領といふを得ん。此經文の最古のものは、紀元前七世紀の頃に記述せるものなるべしとぞ。今其一斑を知らんと欲せば、則ち次の詩句に之を徴すべし。

諸神は絶えず死—大能なる滅絶者—を畏れしかば、繁雜なる儀禮を以て禮拜し、幾度か犠牲を捧げて、不滅のものとならんとせり。斯くて、滅絶者いひけらく、爾等が自ら不滅のものとなりて如く、人間も亦我より自由を得んことを勉むべし。然る時、我當に如何にか處置すべき。諸神答ふるやう、以後は誰も其身を保ちて不滅なることあるべからず。爾ハ其死すべき形體を離すことなかれ、これながものなればなり。もしも知識或は儀禮によりて、不滅を得んと欲するものあらば、死神よ、彼ハ必ず先づ爾に其身體を捧げざる可らず。

犠牲は其儀禮に於ては重要な事と信せられき。然れども人間を犠牲に供するは、大に避けんと欲せたる所なり。次の言を以て之を徴すべし。

神は人間をば其犠牲に供せんとて之を殺しぬ。されど、斯く殺されたる人間より、犠牲に適せる部分は離りて馬に入りぬ。この後、馬は最も犠牲に適せる動物となりければ、神は之を殺しぬ。されど、犠牲に適せる部分ハ離りて牛に入りぬ。神は牛を殺しぬ。されど又離りて羊に入りぬ。次で山羊に入り、犠牲に適せる部分は永き間これに留まり、其より山羊ハ最も犠牲に適せる動物となり。

婆羅門種族が、人間の犠牲を杜絶せんとて、如何に苦心せしむは、右の數行に記せる經文を以て之を想像すべし。

(三) 優波尼沙土經　ウパニシャッドとは『表面の下に横されるもの』の義にして、げに其經理は印度教全体の下に横はれるものなりといふ。是れ亦韋陀經の補充として看るべき。神の性質、宇宙の起原、靈魂の往實及び心物の關係等の問題に關する神秘的觀察を記載せり。最も尊貴せらるゝ經書にして、現



今の教育ある印度人は銳意これが研究に従はざるはなしといへり。

優波尼沙土は後代哲學と婆羅門教との關鍵を爲すものといふも可なり。此經文を案じて後代哲學の起原を尋究するハ興味ある事業なりとぞ。其經理を概言すれば、凡神教的教義にして、中には奧妙なる冥想なりと認むべきもの少なからず。又此經文に附屬して、傳説スメリチと稱する文書ありて、韋陀經と全く神聖なるものとせらる。此等の文書中、殊に摩訶法典マホとして階級の慣習に關することを認めたる十卷と、婆拘提論ボグチとして神祇談を記せるものとを有名なりとす、之を要するに、摩訶法典は世界の創造、宗徒及び既婚者の義務行政に關する事項、婦女子或は夫婦の間の法規、懺悔の禮拜に關する規定、行為に對する報償等に就て、宗教的及び哲學的の教訓を記載せるものなり。今之を詳説するを休めて、其道徳に關する教訓の數句を摘記せんは、

日々勵みて爾の指定せられたる仕事を爲すべし。未來の世界に頼となるべき友を得よ。徳を集積すること、かの蟻が倦むことなく高くその財寶を蓄積する如くあれ。そは爾が未來の家に行くときには、父も母も妻も子も爾に伴はず、たゞ爾の徳のミ爾の道伴なれば。

生物ハ各單獨に生れ來り、單獨に他界し、單獨に罪業の結果を食ひ、又單獨に善の報を得。彼其形體を地に依し去るや、親族と雖も之に従ふべからず。たゞ徳のみ墓の中に彼に侍り、恐るべき暗黒の道もなき處につきそひ行くなり。

他の者に依頼せず、寧ろ自己によりかゝれ。自己の勉強をたのみとせよ。他の者の意志に服従すれば苦痛あり。眞正の幸福ハ自己に依頼するに存するなり。

爾の始めたたる仕事は、飽くまで之を完ふせよ。疲れたるか、更に新しく努力せよ。再び疲れたる

か、もう一度仕事を新しく始めよ。斯てこそ爾は成功を儲くるを得べきなれ。

聖經の精密なる年代を定めんは、容易なることにあらじ。婆羅摩人は揚言すらく、その或る部分ハ二  
百萬年も以前に認められたるものなりと。然れどもマクス、ミューレルは、其著『古梵文學』に、韋陀經  
の最古のものは凡を紀元前千二百年頃に於て成りしものならん、といへり。教授モニエル、ウイリアム  
も略ぼ全意見なれば、之を以て信據すべきものとなすべし。而して經文の概ね彩華ありて而も質朴な  
るは、其特質と云ふて可なり。中には、俗話あり、俚諺あり、科學の理論あり、諸神に捧げたる歌謠あり。  
唯だ經文に十分教ゆる所なきものは、人性の宗教的要求に對する希望と約束と是なり。

讚論經は經書の中に最も古く、又比較的に完全なるものなるが、他の經書は之に比して甚だ浩瀚な  
り。又此等の經書の増補翼註の多き、殆んど無數にして且つ無限なりと謂つべし。藍摩耶那ラマヤナといへる  
經文のみにても、十萬節ありとぞ。サア、ウイリヤム、ジョンズ曰く、

吾人は印度文學に意を向くる毎に、人力の限あることを想はずんばならず。最も長命なる人に  
も、ヒマラヤの山と共に、他國に類なき浩瀚なる經文を、僅かに一回通讀することを以て望むべ  
からず。

吾人ハ以上に於て經書の概略を記述せり。因てこれより更に此宗教の教義の概略を攻究するは、適當  
なる順序なりとす。